

## The background of Zuo Si 左思's writing "Sandufu 三都賦" in Xijin 西晋 dynasty

栗山, 雅央  
九州大学大学院人文科学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/16511>

---

出版情報：中国文学論集. 38, pp.20-33, 2009-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



## 左思「三都賦」は何故洛陽の紙価を貴めたか

栗山雅央

ある時代において、流行した作品にはその作品自体のみならず、当時の社会情勢の中に流行するに至った原因があることがある。西晋の文人、左思（字は太冲、二五三？～三〇七？）の渾身の大作である「三都賦」も同様である。

何故に「洛陽の紙価をして貴からしむ」という故事が誕生したのか。「晋書」左思伝は、以下のように当時の状況を述べている。

自是之後、盛重於時、文多不載。司空張華見而歎曰、「班張之流也。使讀之者盡而有餘、久而更新。」於是豪貴之家競相傳寫、洛陽爲之紙貴。

是れよりの後、盛んに時に重んぜらる、文多ければ載せず。司空張華見て歎じて曰く、「班（固）・張（衡）の流れなり。之を読む者をして尽きて余り有り、久しくして更に新たならしむ」と。是に於て豪貴の家競ひて相ひ伝写し、洛陽之が為に紙貴し。

このように、張華が絶賛し、その後「豪貴之家」の者たちが盛んに書き写したのだが、彼らは「三都賦」のどのような点に惹かれたのであろうか。そこには必ず理由が存在するはずである。

「三都賦」は、左思が十年もの歳月をかけて制作したとされ、「蜀都賦」・「呉都賦」・「魏都賦」の三篇から構成される。その内容は、三国の都である成都・建業・鄴を中心に、それぞれの土地や風俗を詳細に描写したものであり、「文選」に収められている。更に、発表直後から好評を博し、張華が絶賛したほか、皇甫謐が序文を書き、劉逵・

衛権及び張載が注釈を加えている。

では、左思は「三都賦」を何故に制作し、また何時の時点で「三都賦」は完成したのか。これらの問題については未だ十分に明らかであるとは言えない。本稿では、これらの問題についても考慮しつつ、「三都賦」制作当時の時代背景を確認し、「三都賦」に描写される内容と制作時の社会情勢との関係について考察したい。

## 一 「三都賦」の制作意図

左思が約十年の歳月を費やし「三都賦」を制作した意図は何処にあるのか。『晋書』左思伝には、左思自身の出身地を詠んだ「齊都賦」の制作後、「三都賦」の制作を思い立ち、妹の左芬の入内を契機に洛陽に居を移し、「三都賦」を制作したとある。左思は「三都賦」に序文を付しているが（『文選』巻四）、その中で、左思は制作動機について、以下のように述べる。

然相如賦上林、而引盧橘夏熟、揚雄賦甘泉、而陳玉樹青葱、班固賦西都、而歎以出比目、張衡賦西京、而述以游海若、假稱珍怪、以爲潤色。若斯之類、匪啻于茲。

然るに相如は上林を賦して、盧橘の夏に熟するを引き、揚雄は甘泉を賦して、玉樹の青葱たるを陳べ、班固は西都を賦して、歎ずるに比目を出だすを以てし、張衡は西京を賦して、述ぶるに海若を游ばすを以てし、珍怪を仮稱して、以て潤色と為す。斯くの若きの類は、啻に茲のみに匪ず。

ここで左思はこれまでの歴代都城賦の代表作を挙げ、そのそれぞれが現実とは異なる虚構を描き出している欠点を挙げつらい、現状を批判している。更に次のように続ける。

余既思摸二京、而賦三都、其山川城邑、則稽之地圖、其鳥獸草木、則驗之方志、風謠歌舞、各附其俗、魁梧長者、莫非其舊。

余既に二京を思摸して、三都を賦さんとするに、其れ山川城邑は、則ち之を地図に稽み、其れ鳥獸草木は、則ち之を方志に驗み、風謠歌舞は、各おの其の俗に付き、魁梧長者は、其の旧に非ざる莫し。

左思「三都賦」は何故洛陽の紙価を貴めたか

左思は三国の土地や風俗を描写する際に、「地図」や「地方志」に基づいたとする。<sup>(4)</sup>つまり、歴代の漢賦に存在する虚飾を廃し、事実に即した描写を行なうことを宣言するのである。従来の研究でも、「三都賦」序の記述に基づき、その制作意図を写実的描写の実践に求めている。<sup>(5)</sup>事実、「三都賦」本文及び注釈には、左思が「三都賦」を制作したのと、時を同じくして盛んに編纂された地方志に基づく記述が確認できる。したがって、写実的描写の存在は認められる。しかしながら、写実的描写の実践のみが、左思が「三都賦」を制作する上での最重要課題、則ち制作意図であるとする従来の研究には少なからず疑問が存在する。

近年、「三都賦」の制作意図の考察として、徐々に「三都賦」制作当時の時代背景を考慮した研究も現れ始めている。皋厚氏は、当時の時代背景を踏まえた上で、当時の人民の三国統一を願う機運が「三都賦」制作の一つの要因であると論じており、また、顧農氏も、「三都賦」が晋の三国統一の必然性を宣伝し、中原文化による三国統一の必要性を強調した作品であると論じている。<sup>(7)</sup>本稿では、これらの先行研究を踏まえた上で、更に、「三都賦」の制作当時に地方志が盛んに編纂され、西晋時代において地理に関する情報が大量に出現した事実から「三都賦」と当時の情勢との関係を考察したい。

## 二 地方志の編纂と「三都賦」

後漢末から西晋時代にかけて、数多くの地方志が編纂された。それらの多くは書名に「異物志」を冠するものがある。<sup>(8)</sup>また、これらは当時の権力者階層の求めに応じ、その土地に関係がある人物が、これら多くの地方志の編纂に従事したことが既に指摘されている。<sup>(9)</sup>このように、権力者階層において、地方に対する興味関心が非常に強かったことは特筆に値する。

このような状況の中で、左思は「三都賦」を制作する際、序文で宣言したように、多くの地方志に基づいての描写を展開している。特に、「蜀都賦」及び「呉都賦」において、地方志に基づく描写を多く確認することができる。「三都賦」の特徴の一つであると言える。また、「蜀都賦」・「呉都賦」の劉逵注の中にも、頻繁に地方志が挙げられ

ている。その全てを挙げるには限界があるため、いくつか「呉都賦」（『文選』卷五）より例を挙げ考察したい。

草則藿納豆蔻、薑彙非一。 草は則ち藿納豆蔻あり、薑の彙は一に非ざるなり。

江離之屬、海苔之類。

江離の屬、海苔の類あり。

「劉逵注」『異物志』曰、藿香、交趾有之。豆蔻、生交趾。其根似薑而大、從根中生。形似益智、皮殼小厚、核如安石榴、辛且香。納、草樹也。葉如栝櫚而小。三月採其葉、細破乾之、味近苦而有甘、并雞舌香食之、益美。薑彙、大如累、氣猛近於臭。南土人搗之、以爲齏。菱、一名廉薑、生沙石中、薑類也。其累大辛而香。削皮以黑梅并鹽汁漬之、則成也。始安有之。江離、香草也。海苔、生海水中、正青、狀如亂髮。乾之赤。鹽藏有汁、名曰濡苔、臨海有之。

『異物志』に曰く、藿香、交趾（現在のベトナム北部トンキン・ハノイ地方）に之有り。豆蔻、交趾に生ず。其の根は薑に似て大なり、根中に從ひて生ず。形は益智の似く、皮殼は小や厚く、核は安石榴の如く、辛にして且つ香あり。納、草樹なり。葉は栝櫚の如くして小なり。三月其の葉を採りて、細く破りて之を乾さば、味は苦きに近くも甘み有り、雞舌香と并せて之を食らば、益ます美なり。薑彙、大なるは累の如く、氣は猛にして臭きに近し。南土の人は之を搗きて、以て齏と為す。菱、一名廉薑なり、沙石の中に生ず、薑の類なり。其の累大いに辛く香あり。皮を削りて黒梅並びに塩汁を以て之を漬ければ、則ち成る。始安（現在の広西省桂林県）に之有り。江離、香草なり。海苔、海水の中に生じ、正青たり、状は乱髮の如し。之を乾せば赤し。塩もて蔵すれば汁有り、名づけて濡苔と曰ふ、臨海（現在の浙江省臨海県）に之有り。

「呉都賦」において、植物を描写した部分である。劉逵注は左思が「呉都賦」で列挙する全ての植物に詳細な説明を加えている。具体的には、植物の産出地やその外見的特徴、更にはその植物の使用法などである。注目すべきは劉逵注が挙げる「交趾・始安・臨海」は何れも「三都賦」制作当時、呉に属する領域である。特に「交趾・始安」は呉の領土でも南方の現在の広西・広東省及びベトナムに属し、また、これらの地域は「三都賦」の他の注釈でも頻繁に確認できることから、左思の呉の南方地域を重視する姿勢を確認することができる。更に例を挙げよう。

左思「三都賦」は何故洛陽の紙価を貴めたか

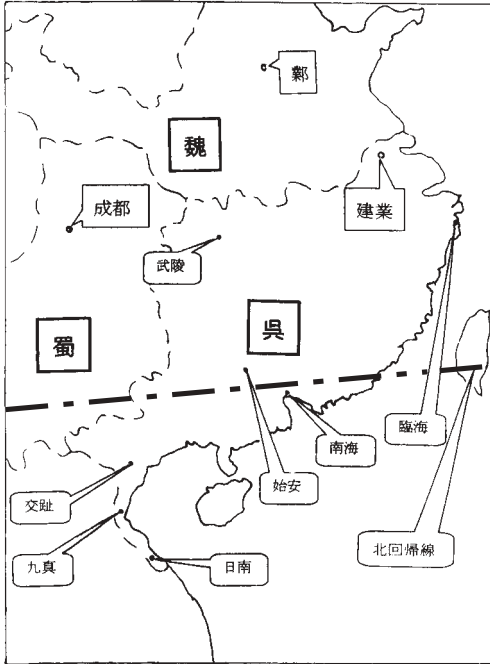
其下則有鼻羊麀狼、猓獠獼象、

烏兔之族、犀兕之黨。

其の下には則ち鼻羊麀狼、猓獠獼象、  
烏兔の族、犀兕の党有り。

〔劉逵注〕『爾雅』曰、鼻羊、一名禺禺。如人、面長脣黒、身有毛及踵、見人則笑。『海南經』所云也。『異物志』云、麀狼、大如麀。角前向、有枝下出、反向上。長者四五尺。廣州有之。常居平地、不得入山林。『山海經』曰、南海之外有猓獠、狀如獼、龍首、食人。獼、虎屬也。或曰、能化爲人也。象、生九真・日南山中。大者其牙鼻長一丈。於兔、虎也。江淮間謂虎爲於兔。犀、狀如水牛、頭似猪、四足類象。倉黑色。一角當額上、鼻上角亦墮也。又有小角、長五寸、不墮。性好食棘、口中灑血。武陵已南山中有之。兕、獸也。『爾雅』に曰く、鼻羊、一名禺禺なり。

人の如く、面長く脣黒く、身は毛の踵に及ぶ有り、人を見れば則ち笑ふ。左手にて管を操る、『海南經』の云ふ所なり。『異物志』に云く、麀狼、大きさは麀の如し。角は前を向きて、枝の下に出づる有りて、反りて上に向く。長さは四五尺なり。広州に之有り。常に平地に居り、山林に入るを得ず。『山海經』に曰く、南海の外猓獠有り、状は獼の如く、龍首にして、人を食す。獼は、虎の属なり。或ひは曰く、能く化して人と爲るなり。象、九真（現在のベトナム南部）・日南（現在のベトナム北部）の山中に生ず。大なるは其の牙鼻長さ一丈なり。於兔は、



【参考地図】三国関連地図

虎なり。江淮の間虎を謂ひて於兔と為す。犀さいは、状は水牛の如く、頭は猪の似く、四足たるは象に類たり。倉黒色（蒼黒色）なり。一角額上に当たりて、鼻上の角も亦墮おつるなり。又小角有りて、長さ五寸、墮おちず。性は棘を食すを好み、口中に血を灑そそぐ。武陵（湖北省竹山県）已南の山中に之有り。兕じは、獸なり。

これは「呉都賦」において、動物を描写した部分である。ここでも劉逵注はその全てに説明を加えている。その際、先に挙げた例と同様に、『爾雅』・『異物志』・『山海經』等の出典を明記し、「呉都賦」の中に挙げた動物が実際に呉の地方に生息するものであることを述べている。ここで挙がる「広州・南海・九真・日南・武陵」も何れも呉に属している。更に「武陵」を除く地域は、呉の領域の中では南方に属しており、特に「九真・日南」はここに挙げた注釈以外に多く挙げられており、ここからも左思の南方、特にベトナム一帯を重視する姿勢が確認できる。

以上に挙げた例で確認できるように、左思は地方志に基づく記述を行なうことで「三都賦」序で批判したように、歴代都城賦に見られた虚構性を排除しようと努めているのである。

「三都賦」に描写される内容と劉逵注が挙げる書物が、どれほどに一致するかという点に関しては、『世説新語』文学篇の劉孝標注に引用される「左思別伝」に、

劉淵林・衛伯輿並蚤終、皆不爲思賦序注也。凡諸注解、皆思自爲、故假時人名姓也。

劉淵林（劉逵）・衛伯輿（衛權）並びに蚤とに終しまり、皆思の賦の序注を為さざるなり。凡そ諸注解、皆思みずか自ら為し、其の文を重ねられんことを欲し、故に時人の名姓を仮るなり。

とあり、劉逵及び衛權は「三都賦」に注釈を施してはあらず、左思自らが彼らの名に仮託して注釈を施したと指摘される。左思が自ら注釈を施したことの当否はともかく、当時、このような説が存在していたことにより、左思が描き出した「三都賦」の内容と、劉逵注が挙げる地方志を中心とした書物の内容が一致することは明らかである。では、何故に左思はこれほどまでに地方志に基づく記述を行なったのか。以下で、その原因について考えてみたい。

### 三 西晋の対吳政策と武帝司馬炎の地理把握に対する関心

左思が地方志に基づく記述を行なった理由の一つとして、当時の社会情勢が挙げられる。具体的には、西晋王朝が蜀を平定した後の、吳を対象とした軍事政策である。これは左思が何時の時点で「三都賦」を制作したのかという問題とも深く関係すると考えられる。以下に、左思が「三都賦」を制作したとされる時期の略年譜を載せる。

泰始元年（二六六）、魏が滅亡し、西晋王朝が建国される。

泰始八年（二七三）、左思の妹である左芬が武帝の後宮に入内し、同時に左思も洛陽に居を移す。この時点で左思は「三都賦」の制作を開始する。また、左思は秘書郎の職を授けられる。

咸寧五年（二七九）、張華が度支尚書の職を授けられる。

太康元年（二八〇）、吳が滅亡し、西晋王朝が三国を統一する。

太康三年（二八二）、皇甫謐が亡くなる。この頃までに「三都賦」の制作が終了したとされる。

太熙元年（二九〇）、武帝司馬炎、張華が亡くなる。八王の乱が勃発する。

『晋書』左思伝の記述に基づけば、妹の左芬が入内し、洛陽に居を移した泰始八年に「三都賦」の制作を開始したことは恐らく間違いない。また、皇甫謐が太康三年に亡くなっているが、彼には「三都賦序」（『文選』卷四十五）が残されていることから、この年までには、「三都賦」は一応の完成を迎えていたと考えられる。更に、左思は十年の歳月をかけ「三都賦」を制作したとされるが、泰始八年から太康三年までは十年間であり、『晋書』左思伝の記述とも符合する。

ここで重要なのは、左思が「三都賦」を制作したとされる十年の間に、吳が滅亡したという事実である。つまり、左思が「三都賦」を制作していたのと、時を同じくして西晋王朝は吳の平定を目指していたのである。西晋王朝内では盛んに吳の平定が議論されていたが、当時、吳の平定に関しては否定的な意見が多く、主戦派は武帝司馬炎を中心に張華・羊祜・杜預のみであった。ここで注目すべき点として、主戦派の内、武帝及び張華が左思と少なから



ず關係を有し、更に両者が共に地方の地理把握に関心を示していた点を挙げる事ができる。

武帝に関しては、公私にわたって地理の把握に努めていたと考えられる。裴秀が武帝に『禹貢地域図』を奏上した際の序文には以下のようにある。

（裴秀）作『禹貢地域圖』十八篇、奏之、藏於祕府。其序曰、「……文皇帝乃命有司、撰訪吳蜀地圖。蜀土既定、六軍所經、地域遠近、山川險易、征路迂直、校驗圖記、罔或有差。今上考禹貢山海川流、原隰陂澤、古之九州及今之十六州、郡國縣邑、疆界鄉陬、及古國盟會舊名、水陸徑路、爲地圖十八篇。」

（裴秀）『禹貢地域圖』十八篇を作りて、之を奏して、祕府に蔵す。其の序に曰く、「……文皇帝乃ち有司に命じて、吳蜀の地図を撰訪せしむ。蜀土既に定まり、六軍の経る所、地域の遠近、山川の險易、征路の迂直は、図記に校驗し、或ひは差ちがうること有る罔し。今上禹貢の山海川流、原隰陂沢、古の九州及び今の十六州、郡国県邑、疆界郷陬、及び古国盟会の旧名、水陸の径路を考して、地図十八篇を爲る。」

（『晋書』卷三十五・裴秀伝）

ここでは、文帝司馬昭が吳や蜀の地図を求めたことが述べられている。文帝の時点では未だ蜀は平定されていないため、吳と蜀の地図を求めたことは、少なくとも蜀及び吳の征伐前の地理把握に努めたためと考えて良いであろう。また、裴秀が『禹貢地域図』を奏上した時点では、蜀は既に平定されたと明記されていることから、実際には武帝は吳の地理状況の把握を目指していたと考えられる。現在は亡佚しているが、この『禹貢地域図』は、建国当初の西晋の地理状況を把握する上で必要な書物であったと考えられる。したがって、当時の社会情勢とも密接に係っていると考えることができ、『晋書』裴秀伝の記述は、武帝の公的な地理情報に対する関心を端的に示していると言える。

武帝個人の地理情報に対する私的関心としては、張華の『博物志』の存在が挙げられる。<sup>11</sup>当初、武帝に奏上した際には、四百巻もの大部な書物であった。武帝は『博物志』に挙げられた内容に対して異を唱え、以下のように編纂し直すように命じている。

自書契之始、考驗神恠及世間閭里所説、造『博物志』四百卷、奏於武帝。帝詔詰問、「卿才綜萬代、博識無倫、

左思『三都賦』は何故洛陽の紙価を貴めたか

遠冠羲皇、近次夫子。然記事採言、亦多浮妄、宜更刪翦、無以冗長成文。昔仲尼刪詩書、不及鬼神幽昧之事、以言怪力亂神。今卿『博物志』、驚所未聞、異所未見、將恐惑亂於後生、繁蕪於耳目。可更芟截浮疑、分爲十卷。……」帝常以『博物志』十卷、置於函中、暇日覽焉。

書契の始めより、神怪及び世間閻里の説く所を考驗し、『博物志』四百卷を造り、武帝に奏す。帝詔して詰問す、「卿の才万代を綜べ、博識なること倫無く、遠きは羲皇に冠し、近くは夫子に次ぐ。然るに事を記し言を採るに、亦た浮妄なること多し。宜しく更に刪翦して、冗長なるを以て文を成す無かれ。昔仲尼詩書を刪し、鬼神幽昧の事に及びて、以て怪力亂神を言はず。今卿の『博物志』は、驚なるは未だ聞かざる所に於て、異なるは未だ見ざる所なり。將に恐るるは後生を惑亂し、耳目を繁蕪せんことなり。更に浮疑を芟截し、分けて十卷と爲すべし。……」帝常に以て『博物志』十卷をして、函中に置き、暇日焉を覽る。

(晋・王嘉『拾遺記』卷九)

武帝は、張華が編纂した『博物志』の内容が怪力亂神に及ぶことを指摘し、これらを排除した上で十卷に再編するように命じている。ここからは、武帝が実状に即した地理的情報の把握を重視する態度が確認できる。また『博物志』を常に傍らに置いていたことから、武帝の地理に対する私的な興味関心を確認することができる。

武帝が公私にわたって西晋の地理把握に努めたことは、左思が「三都賦」を制作する際に、地方志に基づき記述を行なった事実と大いに関係すると筆者は考える。そのため、「三都賦」の制作意図を考察する上で、十分考慮すべき事実であると言えよう。

#### 四 張華の『博物志』編纂と『三都賦』

張華と左思との関係は、張華が最初に「三都賦」を評価したという一点においてのみ、従来は指摘されてきた。しかしながら、「三都賦」、特に「吳都賦」の中で頻繁に地方志に基づく記述が確認できるという事実から、地方志の存在を通して更なる両者の関係を確認することができるのではないかと筆者は考える。

先にも述べたが、張華は『博物志』の編纂者であり、その内容は四百巻から十巻への再編を命じられたものの、武帝にも評価されるものであった。では、武帝は何故に四百巻から十巻への再編を命じたのであろうか。『拾遺記』には、怪力乱神を排除することが目的であったとされるが、果たして、怪力乱神に関する記述を排除することで三百九十巻も削減することができるであろうか。筆者は更に別の理由が存在すると思われる。それは、単純に、すぐに読むことのできる分量を武帝が求めたためではないだろうか。当時は、現実問題として三国の統一が西晋王朝における最大の関心事であり、地理状況の把握は必須条件であったと考えられる。その際に、四百巻もの分量を誇る『博物志』では、すぐに目的の地域の情報を得ることはできない。また、当時盛んに編纂された地方志のそれぞれに眼を通すのは煩わしい。そのため、武帝は張華に『博物志』の再編を命じたのではないだろうか。『隋書』経籍志に拠れば、当時の地方志は一地域に限定したものであれば、その多くは一卷から五巻の間で編纂され、十巻を超えるものは数少ない。そのような中、張華が編纂した『博物志』四百巻は唯一の地理や風土に関する情報を記した大部な書物であると言えよう。

ここで一つの疑問が生じる。果たして、張華は一人で『博物志』四百巻を編纂し、更には十巻に再編し直したのであろうか。三百九十巻も削減することは、張華一人の作業では到底困難である。恐らくは、張華の下に実質的作業従事者が存在していたと考えられる。ここで、「三都賦」で引用される『博物志』に注目したい。以下に、「文選」及び「文選集注」所引「文選鈔」に引用される『博物志』を挙げる。

- (1) 善曰、……『博物志』曰、王孫・公子、皆相推敬之辞。
  - (2) 善曰、……『博物志』曰、虎珀、一名江珠。
  - (3) 善曰、……『博物志』曰、江漢有獮人、能化爲虎。
  - (4) 善曰、……王餘・泉客、皆見『博物志』。
  - (5) 鈔曰、……『博物志』云、蛟人婦女與岸上男子爲淫。好食穴、能織絹。夫行不在、食其二子、夫還捶之、泣珠一盤。淚下皆成珠也。
- (以上、「蜀都賦」)  
(「呉都賦」)  
(「文選集注」所引「文選鈔」)

以上がその全てであるが、注目すべきは同時代の注釈である劉逵注に一カ所も引用が無い点である。劉逵は注釈

左思「三都賦」は何故洛陽の紙価を貴めたか

を付けるにあたり、盛んに『異物志』等の地方志を引用している。にもかかわらず、張華の『博物志』を一度も引用していないのは何故であるうか。恐らくは、劉逵が注釈を付けた時点では、『博物志』は完成しておらず、編纂途中であったと考えられる。だとすれば、劉逵が『博物志』を一度も引用していない事実も説明できる。

更に論を進めれば、左思が『博物志』の編纂の実質的従事者である可能性も指摘できる。先の略年譜にも挙げたが、咸寧五年に張華は度支尚書の職を授けられている。度支尚書とは、租賦物産を調査し、国家の収支の調整を計る職である。張華の就任の経緯は『晋書』張華伝に以下のようにある。

初、帝潛與羊祜謀伐吳、而羣臣多以爲不可、唯華贊成其計。……及將大舉、以華爲度支尚書、乃量計運漕、決定廟算。

初め、帝ひそかに羊祜と吳を伐たんことを謀る、而して群臣多く以爲えらく不可なりと、唯だ(張)華のみ其の計に賛成す。……將に大挙せんとするに及び、華を以て度支尚書と爲し、乃ち運漕を量計し、廟算を決定せしむ。

このように、張華は吳を平定する過程で度支尚書の職を授けられているのである。度支尚書とは租賦物産を調査する職であり、恐らくは、吳の地方に関する地理情報も調査したであろう。更に、この時張華は中書令の職にも就いており、書物の編纂作業をも掌握していたが、この当時、中書省は秘書郎の職をその下に置いていたのである。<sup>(14)</sup>つまり、左思が「三都賦」を制作していた当時、左思自身は秘書郎の職に就き、張華は中書令・度支尚書の職に就いており、左思は張華の直接の部下であったのである。左思が「三都賦」を制作した当時、張華の部下であった事実と、「蜀都賦」・「吳都賦」の中で盛んに地方志に基づく記述が確認できることから、左思が『博物志』の編纂に従事していた可能性は十分に指摘できるのではないだろうか。

## おわりに

左思が「三都賦」を制作した当時は、西晋王朝は三国の統一に向けて邁進した時期であった。そのような状況の

中、権力者階層における地方に対する興味関心が巻き起こる。そのため、数多くの地方志が編纂され、張華も『博物志』を編纂したのである。左思は、洛陽に居を移してから秘書郎の職に就いているが、恐らくは、張華の下で『博物志』の編纂作業にも従事していたであろう。数多くの地方志が編纂されたことにより、地理に関する情報が氾濫し、その情報を整理する必要がある。だからこそ、武帝は当初四百巻であった『博物志』を十巻に再編するよう命じ、左思は『三都賦』を制作したのではないだろうか。

このように、左思は当時の社会情勢に敏感に反応した上で、『三都賦』を制作しているのである。だからこそ、『洛陽の紙価をして貴からし』めることになり、『三都賦』はベストセラーと成り得たのである。

## 注

- (1) 左思の生卒年については葉日光『左思生平及其詩之析論』（文史哲学集成、文史哲出版社、一九七九年）を参照。
- (2) 本稿において使用する『文選』のテキストは清・胡克家重雕宋淳熙本（中華書局、二〇〇五年）を底本とした。また、異同については、適宜諸版本及び『文選集注』を参照した。尚、『三都賦』は『文選』巻四から巻六に収められ、『文選集注』巻八に『蜀都賦』、巻九に『吳都賦』がそれぞれ収められている。
- (3) 『晋書』左思伝に、「安定皇甫謐有高譽、思造而示之。謐稱善、爲其賦序。……張載爲注魏都、劉逵注吳蜀而序之曰、……陳留衛權又爲思賦作略解。（安定の皇甫謐は高譽有り、思造りて之を示す。謐善しと稱し、其の賦の為に序す。……張載爲に魏都に注し、劉逵、吳蜀に注して之に序して曰く、……陳留の衛權又思の賦が為に略解を作る。）とある。
- (4) 本稿における地方志とは、『文選集注』所引『文選鈔』に、「方志、南方異物志之類也。（方志は、南方の異物志の類なり。）」とあるように、南方諸地域の地理・風土・物産を記した書物を指し、明清期に大量に出版される、いわゆる一般的な地方志とは異なる書物を指している。
- (5) 小尾郊一「左思の賦観——魏晋の賦における写実精神」（『広島大学文学部紀要』第十五集、一九五九年。のち『真

左思『三都賦』は何故洛陽の紙価を貴めたか

実と虚構——六朝文学」(一九九四年、汲古書院)に収録)及び、戸高留美子「三都賦」小考——都城賦制作意義の  
変容とその背景について——」(「お茶の水女子大学中国文学会報」第二十三集、二〇〇四年)を参照。

(6) 臧子厚『漢魏六朝文学論稿』(二〇〇七年、東南大学出版社)、「試論左思及其詩賦創作」を参照。

(7) 顧農『文選論叢』(二〇〇七年、広陵書社)、「左思「三都賦」及其序注綜考」を参照。

(8) 内田吟風『異物志』考——その成立と遺文——」(森鹿三博士頌寿記念論文集 一九七七年、同朋舎出版)を参照。

(9) 青山定雄「六朝時代の地方誌について——撰者とその内容——」(『東方学報』第十二冊第三号、一九四一年)を参照。

(10) 『山海経』については、司馬遷の指摘以来、怪力乱神について記述された書物であると考えられているが、左思とほぼ同時代に生存した郭璞(生卒年毛六三三四)が『爾雅』の注釈に利用している点、また郭璞が『山海経』序の中で、「世之所謂異、未知其所以異。世之所謂不異、未知所以不異、何者。物不自異、待我而後異、異果在我、非物異也。(世の所謂異なるは、未だ其の異なる所以を知らざるなり。世の所謂異なるならざるは、未だ異なるならざる所以を知らざるなり、何ぞや。物は自ずから異ならずして、我に待して而して後に異なる、異なる果は我に在りて、物の異なるに非ざるなり。)」と述べ、『山海経』にあらわれる現象や事物が怪力乱神ではないことを述べている点から、左思が「三都賦」を制作し、劉逵が注釈を付した当時、『山海経』は地方志と同様の書物と認識されていたと考えられる。また、劉逵注のみに着目した場合、『異物志』と『山海経』の引用方法がほぼ同様であることから、少なくとも劉逵は『山海経』を地方志に類する書物と考えていたことがわかる。『山海経』と地方志との関係については更なる考察が必要である。

(11) 張華の『博物志』は、『隋書』経籍志では子部・雑家に分類され、『旧唐書』経籍志や『新唐書』芸文志では小説家に分類され、地理書としては扱われていない。したがって、地方志とすることは困難であるが、『文選』に引用される李善注の記述や、武帝の再編命令から判断すると、地方志が有する地理や風土などの説明を行なうという要素を兼ね備えていると筆者は考える。

(12) 『晋起居注』(『太平御覧』卷二百十七)に、「咸寧五年、詔曰、……其以散騎常侍・中書令張華爲度支尚書。」(咸寧五年、詔して曰く、……其れ散騎常侍・中書令張華を以て度支尚書と爲す。)(とあり、張華が地理状況の把握と

ともに書物の編纂をも職務としていたことがわかる。

(13) 『晋書』職官志に「秘書監、……及晉受命、武帝以秘書并中書省、其秘書著作之局不廢、(秘書監、……晋の受命するに及び、武帝秘書を以て中書省に并せ、其の秘書著作の局は廢せず。)」とある。

左思「三都賦」は何故洛陽の紙価を貴めたか